

留意事項

国土交通省不動産・建設経済局長から建設業者団体の長あて通知（令和2年7月31日付け国不建推第3号、国不建整第6号）のほか、次の点について適切に対処すること。

1 下請代金の支払等について

(1) 下請代金の支払等の適正化について

下請契約における代金の支払等について、資金需要の増大が予想される時期を控え、経営基盤の脆弱な中小企業が多数を占める下請業者（資材業者、建設機械又は仮設機材の賃貸業者、警備業者、運送業者等）に対する適正な代金支払の確保に配慮すること。

(2) 下請代金の支払までの期間の短縮について

下請建設企業や資材業者が元請建設企業に対して有する債権について、ファクタリング会社が支払の保証を行うことにより、下請建設企業等の債権保全を支援する「下請債権保全支援事業」が実施されているところであるが、当該事業を活用する場合を含め、全ての元請負人は、下請契約における受注者の資金繰等に配慮し、請求書の締切から支払までの期間をできる限り短くすること。

(3) 手形期間について

北海道発注の建設工事における下請代金の支払に手形を使用する場合は、手形期間を90日以内のできる限り短い期間にするよう努めること。

2 適正な施工体制について

(1) 労働災害の防止について

国の「労働災害防止計画」や、道の「北海道における労働災害の防止に向けた取組方針」などによる関係者の取組により労働災害は減少傾向にあるが、建設業は依然として死亡災害全体の3分の1強を占める状況にあることから、事業所等の統括安全衛生責任者等から現場への指導・援助・教育の徹底や、安全パトロールなどによる工事場所での安全管理の徹底などに十分留意すること。

建設業における死亡労働災害の発生状況は、6月現在、昨年同期の10人から6人と減少しているが、建設現場の本格稼働が続く中であって、増加が懸念されるため、労働安全衛生法令の遵守徹底を図ること。

(2) 施工体制の確認について

道においては、適正な施工体制及び安全衛生管理体制を確保するため、請負人から提出される「積算労務単価報告書」において、「公共工事設計労務単価」との間に一定以上の乖離がある工事などについて、建設工事下請状況等調査及び建設工事安全パトロールを実施し、調査・指導を強化することとしているので、必要な経費の計上に十分留意すること。

また、元請負人は、施工体制台帳の作成を通じて、技術者の配置状況や下請業者の使用状況のほか、外国人技能実習生等の従事状況など施工体制の的確な把握に努めること。

3 社会保険未加入対策について

北海道発注の工事において、雇用保険、労働者災害補償保険（以下「労災保険」という。）、健康保険及び厚生年金保険への加入が義務付けられている下請負人が、それらの法定保険に加入していない場合、元請負人は下請負人に対し、各種法定保険への適正な加入等について指導すること。但しこれは、法律上加入義務のある各種保険への加入を図るものであり、加入義務のない保険への加入を求めているものではないことから、下請契約の相手方として適用除外となる建設業者の排除や、作業員等について現場入場等を禁止することのないよう留意すること。

また、労災保険に加入できない大工、左官、とびなど、労働者を使用しないで建設の事業を行うことを常態とするいわゆる一人親方について、労働者に準じて保護することが適当であると認められる一定の者に対して特別に労災保険への任意加入を認める「特別加入制度」の周知に努めること。

さらに、適正な就業規則の作成に努めることとし、この場合、一の事業場に常時10人以上の建設労働者を使用する場合は、必ず就業規則を作成の上、労働基準監督署に届け出ること。

なお、「道発注工事における社会保険等未加入対策等について」（平成30年3月23日付け建管第1886号）により通知しているが、二次以下の下請負人についても、平成30年4月1日以降に行われる公告又は契約の申込みの誘因に係る契約から、原則、社会保険加入者に限定しているので、留意すること。

4 労働者福祉の向上について

(1) 雇用・労働条件の改善について

建設労働力の需給動向に十分注意し、必要な建設労働者の確保に万全を期すこと並びに労働時間の短縮、労働災害の防止、賃金の適正な支払い、退職金制度及び各種保険制度への加入等雇用・労働条件の改善に努めること。

なお、建設業退職金共済制度については、平成28年4月に「退職金の支給要件の緩和」「被共済者による移動通算の申出期間の延長」「移動通算できる退職金額の上限の撤廃」など、制度が変更されているので、被共済者への周知に努めること。

技能労働者の育成・確保については、適切な水準の賃金の支払いが極めて重要であることから、特段の配慮に努めること。

(2) メンタルヘルス対策の推進について

心の不調などに悩む労働者やその家族、職場のメンタルヘルス対策に取り組む事業者に対する支援や役立つ情報について、専門の情報サイト「働く人のメンタルヘルス・ポータルサイト『こころの耳』」が開設されているので、周知が図られるよう努めること。

また、職場環境の改善に当たっては、北海道産業保健総合支援センターによる職場訪問などの支援や、独立行政法人労働者健康安全機構による助成制度を活用するなどメンタルヘルス対策の推進に努めること。

(3) 季節労働者への有給休暇の付与（前倒付与）について

季節労働者を雇用した場合、有給休暇の付与（前倒し付与を含む。）などが図られるよう努めること。

5 建設副産物について

工事の施工により生じる建設副産物（コンクリート塊等の建設廃棄物及び再生資源となる建設発生土）については、設計図書に明示された施工条件に基づき適正に処理すること。

建設廃棄物の処理に当たっては、廃棄物の処理及び清掃に関する法律（昭和45年12月25日法律第137号。以下「廃棄物処理法」という。）、建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律（平成12年5月31日法律第104号。以下「建設リサイクル法」という。）、建設副産物適正処理推進要綱（平成14年5月30日国官第122号改正）等を遵守し、工事現場の管理を適正に行うこと。

特に、建設リサイクル法に伴う対象建設工事における特定建設資材を用いた建築物等の解体工事又は特定建設資材を使用する新築工事等については、分別解体等及び特定建設資材廃棄物の再資源化等を適正に行うとともに、同法に規定される分別解体等の計画の作成、下請契約を含む請負契約書面への解体工事に要する費用等の記載、届出等事項の下請負人への告知、再資源化等の完了報告、解体工事業の登録等の諸手続について遵守すること。

また、都道府県知事等から許可を受けている産業廃棄物処理業者へ委託した場合であっても、事業者の処理責任が免除されるわけではなく、委託後も事業者はその責任があることから、建設廃棄物の処理を委託する場合には、適正な委託契約の書面による締結及び産業廃棄物管理票の交付・回収等によりこれを適正に管理し、この処理が適正に行われたことを確認すること。なお、委託処理しようとする産業廃棄物収集運搬業者及び処分業者について、その種類、処分の方法（再資源化等）、施設の能力等許可の状況について確認するなど、業者の選定については十分留意するとともに、適正な処理料金を負担すること（排出事業者責任については、別添「産業廃棄物の処理は、排出事業者の責任です」を参照）。

建築物等の解体、改造又は補修工事を行うときは、大気汚染防止法（昭和43年6月10日法律第97号）及び石綿障害予防規則（平成17年2月24日厚生労働省令第21号）に基づき、工事の規模に関わらず必ず事前に石綿の有無を調査し、吹付け石綿や石綿を含む保温材等の使用がある場合は、各法令に基づく届出、作業基準に基づく除去等作業などとともに、除去した石綿等の廃棄物処理法に基づく適正処理など、適切な措置を講じること。また、事前調査は石綿に関し一定の知見を有し、的確な判断ができる者（建築物石綿含有建材調査者、日本アスベスト調査診断協会に登録された者など）が行うよう十分留意すること。

また、建築物等の解体等工事における石綿の飛散を防止するため、石綿含有成形板等を含む全ての石綿含有建材への規制対象の拡大、都道府県等への事前調査結果報告の義務付け及び作業基準遵守の徹底のための直接罰の創設等、対策を一層強化することとし、国では大気汚染防止法の一部を改正する法律が令和2年5月に成立、一部を除き1年以内に施行されることとなったので、改正内容に十分留意すること。（別添「大気汚染防止法の一部を改正する法律案の概要」を参照）

なお、解体途中で石綿含有建材の使用が判明した事案や、工事中の事故等により飛散のお

それがあつた事案も発生しており、このような事態が発生した場合は、石綿の飛散を防止するための応急措置を直ちに行い、必要に応じて大気環境中のモニタリングを実施し、環境影響を把握するとともに、速やかに関係法令に基づき除去等の措置を行うこと。

6 道産品（資材）の活用について

道産品の需要を確保することは、地場産業の育成上きわめて重要であるため、使用資材については、間伐材を使用した木材・木製品、北海道認定リサイクル製品、北海道グリーン購入基本方針に基づく特定調達品目など、道産品を優先的に使用するよう努めること。

7 過積載運行の防止について

道路交通法（昭和35年6月25日法律第105号）等を遵守し、工事施工業者が過積載運行の要求を行わないことはもちろん、請け負った建設工事現場において、過積載車両の搬入・搬出などの違法行為を行わないこと。

8 下請契約の適正化等について

(1) 資材等の運搬業務契約、交通誘導警備業務契約の安全性の確保等について

資材等の運搬業務、交通誘導警備業務に係る契約についても、代金の設定に当たっては、工事の施工に関連する交通事故防止等の観点から、安全性等を考慮した適正なものとなるよう指導すること。

(2) 見積り等における労務単価に係る諸経費分等の適正計上について

見積り等に際して、公共工事設計労務単価を参考資料として取り扱う場合、当該単価は所定労働時間内8時間当たりの労務単価として設定したものであって、所定時間外の労働に対する割増賃金や現場管理費、一般管理費等の諸経費は含まれておらず、別途計上されるものであることから、諸経費分は含まれていないなど公共工事設計労務単価の主旨を十分理解の上適正に取り扱うこと。

例えば、交通誘導警備業務について契約を締結する場合には、交通誘導警備員の賃金等に加えて警備会社等に必要な現場管理費及び一般管理費等の諸経費を適正に計上すること。

9 「建設工事従事者の安全及び健康の確保に関する北海道計画」の推進について

道では、平成29年3月に施行された「建設工事従事者の安全及び健康の確保の推進に関する法律」に基づき、平成31年3月に「建設工事従事者の安全及び健康の確保に関する北海道計画」を策定し、総合的かつ計画的に講ずべき施策等を位置づけているので、この施策の推進に向け、関係機関等と連携するなどして取り組むこと。

10 建設キャリアアップシステムの加入促進について

国では、建設技能者が持っている資格や経験に応じて、適切な処遇が受けられる環境の整備や書類作成の簡素化といった現場管理の効率化に向け、資格や就業履歴、社会保険の加入状況等を登録・蓄積する建設キャリアアップシステムを構築し、平成31年(2019年)4月から本運用が始まっているので、システムへの加入促進を図ること。

11 新型コロナウイルス感染症感染拡大防止に向けた取組の推進について

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止に向け、道の「北海道スタイル」の実践や、国土交通省の「建設業における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」に基づく対策の徹底などに留意すること。

12 とび・土工事業の技術者に対する経過措置の終了について

平成28年6月1日に施行された「建設業法等の一部を改正する法律」により、施行日時点で「とび・土工事業」の技術者である者は、経過措置として、令和3年3月31日までは解体工事業の技術者としてみなされている（以下「みなし技術者」という。）。

この「みなし技術者」を営業所の専任技術者として登録し、解体工事業の許可を取得した許可業者が、令和3年4月1日以降も解体工事業の許可を継続するためには、令和3年3月31日までに登録解体工事講習の受講などにより解体工事業の技術者要件を満たす営業所の専任技術者を配置し、法定期限内（変更があった日から14日以内）に変更届出書を提出する必要がある、この手続きを行わない場合は、解体工事業の許可が取消しになるので、留意すること。

13 経営事項審査受審の徹底について

国や地方公共団体等が発注する建設業許可を必要とする公共工事を直接請け負おうとする建設業者は、建設業法第27条の23の規定により経営事項審査を受けなければならないとされている。

しかし、近年、適正な経営事項審査の結果通知書を有していない等の建設業者が公共工事を契約し、監督処分を受ける事例が散見されるので、審査基準日（決算日）から公共工事を請け負うことができる期間が切れ目なく継続するよう、経営事項審査を受審すること。